



©HIKARU HOSHI

## 第186回定期演奏会 一般発売9/29 [会員先行9/27.28]

2021年11月19日(金) 17:45開場 18:45開演 [18:25～指揮者 角田鋼亮プレトークあり]

三井住友海上しらかわホール

指揮/角田鋼亮(当団常任指揮者)

- ・ベートーヴェン：「騎士のパレエ」のための音楽 WoO1
- ・ストラヴィンスキー：パレエ音楽「かるた遊び」
- ・コルンゴルト：「雪だるま」序曲(編曲：ツェムリンスキー)
- ・ラヴェル：パレエ音楽「マ・メール・ロワ」Op.62

若きマエストロと共におくりしている本日に続いて、次回の定期は11月19日。我らが常任指揮者・角田鋼亮の登場です。次回定期の隠れたテーマは〈こども・遊び・パレエ〉とでも申しましょうか。作曲家たちが美しく紡いだ、夢の響きの数々……ぜひホールで体感していただきたいと思いますので、事前のご案内を少々。

### ◆童話の夢と幻想を、優しく美しいパレエ音楽で満喫——ラヴェル《マ・メール・ロワ》

次回定期のメインに据えられた作品は、フランスの作曲家モーリス・ラヴェル(1875～1937)のパレエ音楽《マ・メール・ロワ》(1912年初演)です。ほんとうに美しくチャーミング。可愛らしい空想から輝かしいほどの壮大さまで、表現のスケールも幅広い、傑作中の傑作です。

フランス語のタイトル《マ・メール・ロワ》を直訳すると、《ガチョウかあさん》。英語で《マザー・ゲース》と言われれば「ああ」と思い当たるかたも多いのではないのでしょうか。童謡とか童話とか広い意味をもつ言葉ですが、作曲家ラヴェルもこのパレエ音楽を、ペローの童話集などさまざまなお話をもとに書きました。

この曲、オリジナルはピアノ連弾のために書かれています。ラヴェルの友人の小さな子どもたちに捧げられていて、《眠れる森の美女のバヴァース》《おやゆび小僧》、《パゴダの女王レドネット》《美女と野獣の対話》《妖精の国》と、実際にピアノを少し習った子どもなら(おおよそ)弾けるくらいの素敵な連弾曲です。

このピアノ版をもとに、ラヴェルはオーケストラ組曲版へ編曲しました(1911年)。これがまた〈オーケストラの魔術師〉といわれた人ならではの見事なアレンジで人気を博しておりますが……さらに、この組曲版をもとにパレエ版がつけられました(1911～12年)。

こちらでは、パレエ用のストーリーを新たにつくったのに合わせて、組曲版の順番を入れ替え、曲と曲のあいだに間奏を書き足し、はじめに〈前奏曲〉も新たに書き下ろし……と、組曲版の良さはまるごとそのままに、イメージをさらに広げた豊かな音世界となったのです。

親しみやすくもデリケートな旋律の美しさ、薫りたつような響きの美しさ……。オーケストラの巧みで繊細な表現を深呼吸させてくれるようなこの感覚は、ぜひ生演奏で体験していただきたいと思います。が、組曲版のほうが演奏時間も短くて演奏しやすいせいも、パレエ全曲版のほうは、意外に実演で聴ける機会が限られています。お聴きのがしなく!

### ◆ウィーン・ロマン派の美しい吐息——神童コルンゴルト11歳(!)の傑作

〈こども・遊び・パレエ〉という隠しテーマでもうひとつ……。ウィーンの生んだ天才作曲家エーリヒ・ヴォルフガング・コルンゴルト(1897～1957)のパレエ音楽《雪だるま》序曲には、驚いていただきます。なんと、神童コルンゴルト11歳のときの作品(!)です。

彼は音楽的に恵まれた環境に育ったせいも、幼い頃からずば抜けた楽才を発揮。物心つく頃には作曲を巧みにこなし、父と親しいウィーン宮廷歌劇場の音楽総監督だったマラーも驚嘆させていました。

コルンゴルト少年が楽しげに作曲するのを見て、父は舞台用の台本を書き、これに曲をつけてごらん……と渡します。ピエロやコロンビーヌなど、イタリアの仮面喜劇の登場人物たちが登場するそのパレエ=バントマイム《雪だるま》は、ピアノ版で40分もの立派な作品に仕上がりました。

さすがに、まだオーケストラ編曲するだけの経験はなかったもので、作曲の先生であるアレクサンダー・フォン・ツェムリンスキー(1871～1942)がピアノ版からオーケストラ版を作成。しかし、少年の原曲がもつメロディの美しさや和声の豊かさ

は手を加えていないというから凄い話ですが、これがウィーン宮廷歌劇場で初演されて大成功。拍手喝采にこたえてステージに現れた作曲家——初演当時は13歳——をみて、観客たちは仰天します(でしょうね……)。

次回定期では、この《雪だるま》から序曲をお聴きいただきます。甘やかで洒落た、ロマンティックの極みという美しい音楽には、作曲家の年齢を忘れて酔わされてしまうでしょう!

〈ウィーン・ロマン派の最後の吐息〉と評されたこの天才作曲家コルンゴルトは、数々の素晴らしいオペラを書いて、時代の寵児に。しかし、戦禍に追われてアメリカへ亡命。名匠ハイフェッツが愛奏したヴァイオリン協奏曲ニ長調(マエストロ角田は、11月5・6日の日本フィル定期演奏会への初登場で、この協奏曲をプログラムに入れています)や、交響曲嬰へ調(傑作!)を書き……と、波乱の生涯については、早崎隆志『コルンゴルトとその時代 “現代”に翻弄された天才作曲家』[みすず書房、1998年]という本をぜひ。

### ◆オーケストラでカード・ゲーム!——ストラヴィンスキーの機知

ラヴェルやコルンゴルトも活躍した激動の20世紀……。パレエ音楽の世界で最も存在感を輝かせたのは、ロシア出身の作曲家イーゴリ・ストラヴィンスキー(1882～1971)でした。次回定期では、彼のユニークなパレエ音楽《かるた遊び(カード遊び)》をお楽しみいただきます。

副題に《3回勝負のパレエ》がついているように、3部分から成るこの曲(1937年初演)は、ポーカーの3番勝負をパレエ化したもの。実際の舞台上演でも、ダンサーがそれぞれカードを模した衣裳をつけて、その動きで勝負を表現してゆくといい仕掛けでした。

音楽のほうも、めまぐるしく変わる曲調にカード・ゲームのやりとりが鮮やかに表現されていて、なんとも楽しいものです。スペードとハートの闘いでは、なぜかロッシェニ《セビリヤの理髪師》序曲をはじめ過去の名作たちがパロディ風に引用されたりと、音楽だけでも笑える作品です。

ストラヴィンスキーといえば、1910年代に轟々たる反響を巻き起こした《火の鳥》《春の祭典》《ペトルーシユカ》という3つのパレエ音楽が有名ですが、あちらはもっぱら大編成オーケストラのために書かれた音楽。後年の、少し小さめの編成に書かれたパレエ音楽も、練れて熟した筆致の傑作ぞろいなので……ぜひこの機会にお楽しみを!

### ◆ベートーヴェン若書きのパレエ——ハイドンと出逢った頃の秘曲!

今回の定期で取り上げられる作品を、演奏順とは逆にご紹介してきたのですが、〈こども・遊び・パレエ〉というお題でいざば意外な作曲家が、最初に演奏されるルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)でしょうか。

次回定期で演奏される《騎士のパレエ》(1791年初演)は、若きベートーヴェンが故郷ボンの宮廷オーケストラのヴァイオラ奏者として働きながら、こつこつと作曲の腕を磨いていた頃の初期作品。ドイツの貴族たちが集まる(ドイツ騎士団)という組織の会合で、貴族たちが古い民族衣装をつけて踊るパレエのために書かれたものです。

謝肉祭の出し物として上演されたので、オーケストラの編成も小さくて、後年のベートーヴェンを思えばずいぶん明快素朴、ダンスの生命力と気品とが心地良い音楽をお楽しみいただけると思いますが……この曲が書かれた頃、若きベートーヴェンが腕を磨くボンの街に、大先輩の作曲家であるハイドンが(ロンドンへ赴く途中に)立ち寄り、ボンの音楽家たちとも会っています。

巨匠ハイドンと、若きベートーヴェンとの出逢い……。まさにその時期に書かれた《騎士のパレエ》は、マエストロ角田がセントラル愛知響とお送りしている演奏会シリーズ《ハイドンのロンドン精神》(Vol.2 は12月10日に開催されます)とも繋がるといっていいですね。そちらの予習もかねてお聴きいただきたく……ぜひ次回このホールでお会いいたしましょう。

#### やまのたけひろ 山野雄大

ライター[音楽・舞踊評論]。『音楽の友』『レコード芸術』『バンドジャーナル』各誌をはじめ雑誌・新聞への寄稿、テレビ・ラジオ番組での解説、CDライナーノート・企画構成、オーケストラやパレエ公演の演目解説、取材撮影など多数。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》司会・構成。

Profile

